266　下津井（しもつい）城跡　　倉敷市下津井・下津井吹上２丁目ほか　＜県指定史跡＞　地図 25 左

位置　下津井港と塩飽諸島を南に見据える標高 90 mの丘陵状に位置する。城からは瀬戸内海方向の眺望に優れ、海を行き交う船を見張るには絶好の位置にあたる。城から四国までは幅 10㎞の海峡となっている。さらに、城下にあたる下津井港は古代より潮待ちの港として要港であった。以上、下津井城は瀬戸内水運を押さえる上で、重要な要衝に位置する。

概要　城域は東西約 600 m、南北 90 mを測る。東西及び南側は切り立った崖となっている。城は西から「西の丸」・「二の丸」・「本丸」・「三の丸」・「中の出丸」・「東の出丸」という５つの曲輪からなっている。部分的に土塁や堀切、土橋など中世城郭的な縄張りが認められるが、ほぼ全ての曲輪が石垣化された近世城郭である。破城のため、石垣の残存状況は良くないが「三の丸」の南には現状高さ５mを超える石垣が残されているだけでなく、曲輪の天端付近に栗石の散布が認められることから、築城当時は８mを優に超える高石垣により、侵入者を強力に遮断していたと思われる。城の最も西にあたる「西の丸」の北側と西側、そして最も東にあたる「東の出丸」北側には野面積みの石垣が残っている。いずれも高さも２m程度と低い上、「東の出丸」では隅角が鈍角に開く鎬積となる。しかし、この部分の隅石はノミによる加工痕跡を残す割石となっており、いわゆる野面積みの石垣ではない。「本丸」及び「二の丸」では、倉敷市教育委員会により発掘調査が行われている。本丸及び天守台付近の調査では城の機能時のものと考えられる唐津焼や土師器皿、貝類などが出土している（文献 243・244）。なお、「本丸」や「二の丸」の各所で岡山城跡と同范となる瓦が出土しているほか、姫路の心光寺と同范となる平瓦も出土している。「二の丸」の調査では門柱跡と考えられる柱穴が検出されている。位置関係からみて幅２間の門であったと推測されている。また、門が検出された位置から考えて、本丸への侵入ルートは現在のように「三の丸」の南東隅から直線的に入城するのではなく、「二の丸」の南にあったとされる大手から、数度の折れを経由して入城していたとする。

文献・伝承　下津井城の築城時期について、明確に記した文献はない。年欠ではあるが、小早川隆景から村上武吉あてた文書中に「下津井」の名が見える。このことから毛利期に何らかの城郭が存在していた可能性がある。以後、慶長６～７（1601 ～ 1602）年には小早川秀秋の重臣である平岡頼勝が入城し改修を開始するも、秀秋夭折により頓挫した。続く慶長８（1603）年、備前国は播磨国姫路城主の池田輝政の子、忠継に与えられる。この時、輝政の実弟であった池田長政が、播磨国赤穂城より転じて下津井城に入り、翌慶長９～ 11（1604 ～ 1606）年にかけて、改修を実施した。石垣の特徴からみて現在「本丸」と「二の丸」、「三の丸」など、下津井城の中心となる曲輪はこの時期に改修を受けたものとみて良いだろう。長政死没後、慶長 14（1609）年に池田氏の門閥家老である池田由之が城主となった後、家老交代により荒尾成房・成利がその跡を継ぐ。その後、寛永 16（1639）年に破却されたとする。ただ、朝鮮通信使の記録によれば、元和３（1617）年にはすでに毀撤、すなわち城は壊され城兵も撤退していたとする（一次資料 283）。よって城郭としての機能は、元和初頭には失われていたものか。　（和田）

写真 220　「三の丸」の石垣（南東から）

第 205 図　下津井城跡縄張り図（1/3,000）